ISSN 0915 - 9266

# ネットワーク 資料保存

第 109 号 2015 年 2 月
日本図書館協会
資料保存委員会

## 在外和古書の保存など
## －EAJRS@ルーヴァン報告－

安江明夫

### 1．はじめに

2014年９月、ルーヴァン大学（ベルギー）でEAJRS（European Association of Japanese Resource Specialists、日本資料専門家欧州協会）の第25回年次大会が開催された。EAJRSは名称とおりに主として欧州の日本資料専門家の集まりで、図書館司書が多いが、博物館・美術館関係者等も集う。また日本研究者が史資料担当者であることが少なくなく、年次大会でも日本関係文化財を対象とした研究報告が多い。今大会の参加者は77人。

同大会ではこのところ毎回、特別セッションを設けている。今次の特別セッション・テーマは「文化財の保護・保存・修復（Protection, Preservation and Restoration of Cultural Properties）」で、EAJRSが資料保存関連の特別セッションを設けるのは初めての由。筆者はこのテーマに関心を抱き、同大会に初めて参加した。

以下、資料保存関連の簡単な報告を筆者の感想を交えて記す。

ルーヴァン大学近辺

### 2．資料保存セッション

特別セッションの発表テーマをまず示す[注1]。（以下のサイトで発表スライドを見ることができる。http://eajrs.net/）

①在欧和古書の保存について：調査結果と若干のコメント（安江明夫）／2014年夏に筆者が実施した在欧和古書所蔵機関向け資料保存アンケート調査の結果紹介とコメント。

②コロンビア大学東亜図書館所蔵「下燃絵草紙」の保存（野口幸江、コロンビア大学、米国）／劣化損傷の著しい貴重和古書（江戸期写本。巻子装）の処置事例報告。

③日本の屏風仕立て文書の物語：日本からイェールへ、またイェールから日本へ（中村治子、イェール大学図書館、米国）／屏風

CONTENTS

在外和古書の保存など－EAJRS@ルーヴァン報告－ …… 安江明夫 1
第８回資料保存シンポジウム紹介…… 高橋幸伸 4
〈参加報告〉資料保存セミナー「図書資料の修理－基本的な考え方と知識・技術－」… 小原智未 5
〈参加報告〉資料保存セミナー「外務省外交史料館見学会」…… 石川広樹 6
〈参加報告〉第100回全国図書館大会第17分科会
　知っておきたいカビ対策のイロハ～図書館現場のIPM～ …… 茅根　拓 7
雑感「３年を経て考える福島の図書館」其の二「沿岸部図書館の資料補完を考える」… 吉田和紀 8
資料紹介 BOOK『文化財IPMの手引き』…… 8
資料保存委員会委員の紹介…… 9
資料保存委員会の動き…… 10

仕立てされた日本の古文書（イェール大学貴重書図書館所蔵）を日本に里帰りさせ、元の古文書形態に戻した事例の報告。

④ケンブリッジ大学図書館所蔵日本語古書のデジタル化と保存（小山騰、ケンブリッジ大学、英国）／同大学図書館所蔵の和装本は数冊ごとに洋式に合冊製本されている。それ自体の書誌的問題とそれをデジタル化する際の困難及び解決策の追求。

⑤東日本大震災における紙文化財の保全活動－現地の救出活動と下張り文書の解体処置－（山口聡、東京大学史料編纂所）／津波被災した宮城県大島町漁業協同組合資料の救済事例及び歴史資料として重要な下張文書の解体処置の報告。

以上のうち、欧米からの報告に少しコメントさせていただく。

まずアメリカからの報告②③は貴重資料に対する保存修復処置の事例である。コロンビア大学のケースは同大学図書館保存部で、イェール大学のケースは東京大学史料編纂所で処置された。いずれも確かな技術によって処置され、処置記録も作成されている。司書とコンサバター、さらにイェール大学のケースでは研究者も加わり、それらの人達の連携のもとに作業が進捗した。処置後、資料デジタル化も実施された。

その結果でもあろう。保存処置により資料について種々の発見、再発見があり、史料価値が飛躍的に高まったことが発表から伺えた。コロンビア大学のケースでは、処置後、従来「題不詳」とされた絵巻写本が初めて希少な「下燃絵草紙」と同定できたと言う。こうした意義は大きい。

④のケンブリッジ大学図書館の報告は別の点から興味深いものだった。

和装本を英国で洋装に仕立て直したことについて、あるイギリス人日本学者は「これはバンダリズム（破壊行為）」と憤慨している。それを報告者の小山さんがスライドで紹介しながら、和古書デジタル化計画における課題として説明した。和古書を合冊洋装製本したことにより、開きの悪いものが少なくないのである。これではスキャンするのが難しい。

洋装を元の和装に戻せるか、それにはどれほどの技術・時間・コストが必要か、仕立て戻しの範囲を限定するか、仕立て戻した場合にその後の資料の保護をどうするか…。ケンブリッジ大学図書館和古書の原資料保護を含めたデジタル化計画の今後が注目される。

特別セッションで予定された６件の報告のうち、ケンブリッジ大学の小山さん及び筆者のものを除く４件（欠席のイタリアからの報告を含む）は「修復」「保存修復」をテーマとした。それらは優れた報告であったが、しかし資料保存に関わる者としては、次の点が気になった。

それは、資料保存を劣化損傷した資料の「保存修復」と同義と考える従来型の理解があるが、４件の発表はそれを助長するきらいがあるように思われた点である。

こうした資料保存理解は筆者が実施した在欧和古書保存調査の回答にも伺えた。

調査回答で「修復してもらいたい貴重な資料が沢山ある」「和装本を修復できるコンサバターが必要だ」「自館のコンサバターを日本に派遣して修復技術を習得させたい」等の課題・要望が多く示された。そこに示された状況は理解できるが、それを「コレクション全体を視野に、予防に重点を置き、利用を重視する保存」へと切り替える必要があるだろう。私の発表の第一の主眼点はそこにあった。

他方、ベルリン国立図書館は和古書デジタル化計画を実施し、同時に各書の保存カルテ作成、保存箱収納を行ったと調査回答で記述している。補修などの処置はしていない。これは新しい資料保存の考え方に立脚した優れたプロジェクトと理解した。

因みに資料保存の新しい考え方からコロンビア大学の事例を検討すると、以下を指摘しうる。

そこでは和紙がパリパリで「触ることも不可能なほど、ひどい状態」（野口）の貴重な写本がコンサバターの手によって丹念に処置された。それは良いとして、しかし耐久性の良い和紙がそこまで脆弱化したのは何故か。そう問うことが司書とコンサバターに求められのではないか。

「下燃絵草紙」和紙の劣化原因は、あるいは北米の図書館によく見られる冬季暖房による書庫の過乾燥ではないか。もしそうなら「下燃絵草紙」だけでなく、同所に保管されているすべて

の資料への同じ悪影響が懸念される。貴重な「下燃絵草紙」の保存処置とともに、劣化原因の探究とそれに基づく対策が必要ではないか。それがコレクション全体の良好な維持管理に繋がる。

## ３．EAJRSとしての取組み

私の発表の第二の主眼点は、資料保存における協力の必要性である。

協力では、欧州内と欧州・日本間が特に重視されようが、いずれにおいてもEAJRSのような国際団体の活動に期待が寄せられる。

欧州内ではまずは資料保存に関わる知見、経験、情報の交流・交換が肝要である。EAJRS HPに資料保存ページが用意できれば情報共有のプラットフォームとなる。それにより環境整備、保存アセスメント、保存計画、防災計画、デジタル化等で情報を交換し、経験を共有し合っての前進が期待できる。

調査回答では保存関連の研修実施、コンサバターの日本への派遣等を期待する館が多かったが、こうした企画も単独の図書館で実施するより、EAJRSがリーダーシップを発揮する方が具体化し易く、かつ成果も共有し易いのではないだろうか。

EAJRSは協会であるが学会的組織でもあり、関係機関、関係者の緩やかな連携により成り立っている。それには長所がある一方、具体的行動を起こし、図書館活動を前進させるには多少の困難が推測される。

その点を克服すべく実施されてきた計画－と筆者は理解するのだが－が欧州和書総合目録プロジェクト、天理古典籍ワークショップ等である。それらに続けて、資料保存をテーマとするプロジェクトを立ち上げ、EAJRS参加館の資料保存の前進を計ってはどうか。そのサジェッションを筆者報告のまとめに含めた。

この提案はEAJRS理事会で早速に検討され、大会期間中に和古書保存WGを設置することが承認された。現在、EAJRS HPに和古書保存WGのページ開設が準備中であり、かつ和古書所蔵機関への訪問保存調査が計画されている。

在欧日本資料所蔵機関の中で、資料保存に関わる連携協力が勢いよく動き始めている。関係者の昨年（2014年）９月大会以来の迅速かつ精力的な活動は称賛に値する。上記WGの今後の活動に期待したいが、また必要に応じて日本側関係機関との連携協力も進めたいものだ。

## ４．終わりに

以上、資料保存テーマに限定してEAJRSルーヴァン大会の様子を簡単に記した。終わりに今大会をホストしたルーヴァン大学に触れて結びとしよう。

ルーヴァンには1425年、カトリック神学校（現在のルーヴァン・カトリック大学）が創立された。ルネサンスを代表する人文学者エラスムスが同校の教壇に立ち、地図の投影法で知られる地理学者メルカトルがここで学び、教えた。

ルーヴァンはグーテンベルクが活版印刷術を開発した後、ドイツ外で最も早くに印刷所が設けられた都市の１つとしても知られるが、これもそこが大学都市であったからだ。こうしたことからもわかるように、ルーヴァンは古くから大学を中心に栄えてきた都市で、今も中世の趣を遺す。

大会中、ルーヴァン大学神学・宗教学図書館（Maurits Sabbe Library [注2]）をツアーで訪問したが、同館の蔵書総数は130万冊、17世紀末までの貴重書が20万冊と言う。貴重書には1200点の写本、700冊のインキュナブラ（16世紀以前の初期刊本）が含まれるが、それらにいとも容易に接架できるのに、見学者の皆が驚いていた。そのことの資料保存上からの是非は別として、歴史的･学術的蔵書の豊富さは素晴らしい。

貴重書庫ツアー

ルーヴァン大学の図書館については、２度の世界大戦で図書館が破壊され、多大の蔵書が焼失した歴史に触れないわけにはいかない。[注3] 大学図書館では、その遺物－焼け焦げた図書－

が炎上する市街地の写真とともに常設展示されている。第一次世界大戦と言えばちょうど１世紀前のこと。その惨状の様子と「かつての文化破壊を我々は決して忘れない」決意に、胸が締め付けられる思いがした。

1914年の火災により炭化した本の展示
（ガラス箱に収納・封印）

第一次世界大戦時の蔵書30万冊の被災に対しては、日本からも図書寄贈による図書館復興支援が行われた。渋沢栄一を中心とする官民共同事業で寄贈図書数は約１万４千冊。その時に寄贈された図書類がEAJRS大会開催に合わせて特別展示されていた。

が、これにも数奇な経緯があったとの話。第二次世界大戦時にルーヴァン大学図書館は蔵書90万冊を擁していたが、1940年５月のドイツ軍攻撃によりその殆どを焼失した。被災を免れた図書は僅かに２万冊程度と言われているが、その多くは日本からの寄贈図書だったと言う。現在、ルーヴァン大学図書館には、第一次世界大戦後に日本から寄贈された図書約４千冊が遺されている。

大学と都市、グーテンベルク印刷術の世界伝播、国民文化と蔵書、戦争による蔵書破壊、国際文化交流と図書館…、歴史と文化について様々な想いに駆られたルーヴァン訪問であった。

（やすえ　あきお・学習院大学非常勤講師）

注１　なお、特別セッション・プログラム中のイタリアからの「日本画の再生」報告は発表者が欠席。日本からの「芝居町道頓堀五座と劇場大工」報告はテーマが離れるのでここでは紹介しない。

注２　以下のHPを参照のこと。http://theo.kuleuven.be/gbib.en/

注３　ルーヴァン大学図書館の被災については、ヴォルフガング・シヴイェールブシュ（福本義憲訳）『図書館炎上－２つの世界大戦とルーヴァン大学図書館』（法政大学出版局、1992）、日本からの支援については、小山騰「ルーヴァン大学図書館への日本語書籍寄贈事業」（『渋沢研究』no.10,1997）が詳しい。

## 第８回資料保存シンポジウム紹介

高橋幸伸

平成26年10月20日（月）東京国立博物館平成館において、情報保存研究会（以下JHK）、日本図書館協会共催の第８回資料保存シンポジウムが開催された。「資料の保存とデジタルアーカイブ－現在の取り組み、今後の課題－」というテーマで、特別講演及び参加企業による資料保存実用講座と及び製品の展示や技術紹介が行われた。

特別講演は資料防災に始まり、保存のための体制づくりや効率的な修復方法について以下の講演が行われた。

・「東京都立図書館資料防災マニュアルについて」東京都立中央図書館資料保全専門員・日本図書館協会資料保存員会委員長　眞野節雄
・「災害を前提とした文化財保護対策の構築-日本学術会議提言によせて」熊本大学文学部教授　木下尚子
・「文化財未指定の古文書修復の必要性－具体的対応と問題点について－」涛声学舎舎主・元敦賀短期大学教授　多仁照廣

講演の中で印象的だったのは、単に資料を保護するというだけでなく、修復及び保存することによって後世に情報を伝えていかなければならないという言葉だった。

なお、JHKのホームページhttp://www.e-jhk.com/html/index.htmlには、講演者が使用した資料が掲載されていので、それも参考にしていただきたい。

実用講座は、発表されたどの企業も製品や持ち得る技術について丁寧に紹介していた。多種多様な技術や製品があり、資料保存の必要性を感じる事ができた。余談だが説明を行った企業の中には、丁寧すぎるあまりに持ち時間を超え

てもプレゼンテーションを行っている所もあった。

企業展示についても各社が持つ技術や製品の紹介があり保存に関する意識の高さを再認識することができた。実際に製品を展示していたり、商品サンプルを配布していたりする企業もあり、購入を考えている参加者にとってはよい検討材料になろうかと思われる。また参加者が出展企業と情報交換できる場もあり、疑問に感じている事項を解決する機会にもなった。

予定時刻よりも若干遅い終了となったが、それだけに充実した内容だったともいえるであろう。

（たかはし　のぶゆき・資料保存委員会委員）

## 〈参加報告〉資料保存セミナー「図書資料の修理－基本的な考え方と知識・技術－」

小原智未

壊れ方や状態がそれぞれ異なる本をそれぞれどうやって修理したらよいのか、そして人手や時間が限られている中でどれくらい修理を行えばいいのか…図書館の日常業務の中で修理が必要な本を目の前にした時に、どのように、あるいはどの程度その本を修理していくかということは、非常に悩ましい問題かと思います。図書館に勤務しはじめて２年目となりますが、壊れた本を見つけるたび、修理の必要な本を並べる棚が逼迫していく様子を見るたびに「この本はどうやって修理したらいいだろうか…。」とため息をつきながら日々を過ごしています。

そんな中、2014年６月30日（月）に日本図書館協会で開催された、資料保存委員会主催の「図書資料の修理－基本的な考え方と知識・技術－」に参加し、資料保存に関しての考え方といくつかの修理方法を学ばせていただく機会を得ました。

セミナーでは東京都立中央図書館の眞野さんを講師に、まず修理の基本的な考え方を講義形式で学び、その後実習形式で持参した本を修理することで、実際の修理方法や技術を教えていただきました。

講義の中で特に印象に残ったのは、図書館の本の修理は美術館や博物館等で行う修理とは違い、利用を保証するために修理する、という点です。「基本」の考え方であり、こうして一度教えて頂いてみれば当たり前のことのように思われますが、その基本中の基本がわかっていなかったのだと気付かされました。そして、本にとっては修理をすることはそもそもよくないことであって、「壊れているから直す」という風に考えるべきではないということを知り、改めて自分の修理が必要な本の扱いを見直さねばならないと反省いたしました。また、壊れているからと強固に、そしてどの本も同じように修理するのではなく、本の構造やどのような素材や性質の本であるかということをよく理解し、その本の価値や利用頻度を考えながらその本に合わせた修理をしていく必要があるということも学び、本に対する知識を持つことの重要性を感じました。

実習では、ページ破れ、はずれ、のどのゆるみ、はみ出したページの切り落とし方、本の本体と表紙部分が外れた場合にクータを入れて修理する方法について等々、盛りだくさんの内容を教えていただきました。本の修理の方法については本やインターネット上でもさまざまな方法を知ることができますが、自分の目で実際に修理方法を見せていただくと、気づかされること、学べることがとてもたくさんあります。今回の実習でも、修理に利用しているのりの種類、その濃さや塗り方ひとつとっても勉強になることがたくさんありました。今後の業務の中でぜひ活かしていけたらと思います。

やはり「百聞は一見にしかず」です。本の修理は実際に教わる機会やノウハウを知る人が身近にいなければ実践するのはなかなか難しいことかと思います。今回のセミナーもそうでしたが、本の修理に関するセミナーは定員が早くから埋まってしまい申し込んでも受講できないことも多く、非常に需要は高いのではないでしょうか。修理方法や保存の考え方を学べるこのようなセミナーへ参加できる機会が増え、本の修理に頭を抱える多くの方の悩みが少しでも解消されることを願います。

講師の眞野さんをはじめ、セミナー中サポートしていただいた資料保存委員会の関係者の皆

様と参加者の方々、参加するにあたりご配慮いただいた図書館の皆さまにこの場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

（おはら　ともみ・東京大学駒場図書館）

## 〈参加報告〉資料保存セミナー「外務省外交史料館見学会」

石川広樹

平成26年10月８日（水）に開催された日本図書館協会資料保存委員会主催「外務省外交史料館見学会」と題して、外務省大臣官房外交史料館課長補佐、柳下宙子（やぎしたひろこ）氏にご案内いただき、見学会が行われた。

見学会の内容は、主に３つに分けられる。『保存活動について』『補修作業について』『現場見学』である。

### １．保存活動について

まず、書庫の温湿度管理である。各書庫にデータロガーを設置し、定期的に温湿度を測定、そのデータを分析し、問題があれば書庫環境を改善に努めている。書庫が地下にあるので、外気の影響を受けにくいという環境なので、湿度60%を越えると除湿機を稼働させたり、サーキュレーターをまわすという方法で改善にあたっている。

ほかに、パッシブインジケーターや二酸化窒素測定、環境モニターを用いて書庫環境をチェックし、書庫内空気が所蔵史料に適切であるか判断している。

さらに、害虫トラップを用いた害虫等の生存確認も行っている。今のところ害虫による被害もなく、また、保存環境管理が徹底しているためカビも一度も発生していないという。

次に史料の保存については、外務省特有の悩みとして、外国から来る文書は日本の公文書より大きいものが多く、既成のファイルカバー（簿冊用の綴込表紙）からはみだしてしまう。はみだした部分は酸化劣化の進行が早く、触るだけでボロボロになってしまうものも多い。そこで、はみでた史料をコピー用紙（中性紙）で挟み、人の手や光が当たらないように保護する。また、はさんである中性紙をいつ入れたかを記録して管理し、定期的に交換することで史料をより良い状態で保っている。この方法は、特に補修技術を要さないので、一般の職員にも気づいた時点で作業することをお願いしている。

また、保護が難しい大判史料や劣化・褪色しやすい史料はスキャナーやデジタルカメラを用いてプリントアウトした複製を作成し、ファイルに綴じ込み、原本は同じファイルの最後に中性紙の封筒に入れて綴じ込んだ。これにより、史料の情報を公開しつつ、良好な状態で保存できる。

### ２．補修作業について

外交史料館で行っている補修作業は、糊や和紙を使用する作業、ドライクリーニング、酸性紙の中性化やテープ類や金属の除去作業などがある。その他、超音波により２枚のフィルムで脆弱化した史料を接合し保護するエンキャプシュレーション、箱・畳紙を作り史料を保護するなども行っている。外国の文書には、皮革類や羊皮紙、その国特有の製法の紙などがあり補修には専門性が重視される。

### ３．現場見学を通じての感想・まとめ

史料の補修での現場では、理想と現実を常に意識しながら、その職場に応じたやり方を見出しているのが伺えた。例えば、補修の専門家は埃を払うのに羽ぼうきを推奨しても、はけでも十分な効果があるためはけを使っていること。史料にはさむ中性紙は純性のほうが良いが、コピー用紙を頻繁に取り替えることで補っていること。現場にあるブックトラックは傾斜が急であり、史料に負担がかかるため理想の17°に保つために置き方にも配慮しているなど、繊細な配慮がなされていた。この見学会を通じて、資料保存の大切さを実感し、日々の図書館業務を改めて見直す研修となった。今後とも、多くの史資料を後世に継承していく技術と知識を身につけられる図書館員を目指し、学んでいきたいところである。

（いしかわ　ひろき・東京都墨田区立
東駒形コミュニティ会館図書室）

〈参加報告〉
## 第100回全国図書館大会第17分科会 知っておきたいカビ対策のイロハ ～図書館現場のIPM～

茅根　拓

第100回全国図書館大会第17分科会が明治大学で平成26年11月１日（土）に行われた。午前の部は、初めに東京文化財研究所保存修復科学センターの佐野千絵氏から「カビの制御－IPMに則って」、次にカビ相談センターの高鳥浩介氏から「カビ発生のメカニズムと健康被害」と題した基調講演があった。午後の部は東京都立中央図書館の眞野節雄氏から同館の事例、東京大学法学部研究室図書室の菅野朋子氏、東京大学駒場図書館の田﨑淳子氏からは東京大学付属図書館の事例報告があった。続いてイカリ消毒株式会社の川越和四氏のワークショップ、最後に富士フイルムの板橋祐一氏による震災特別報告「写真救済プロジェクトについて」があった。

東京文化財研究所の佐野氏の基調講演は、①カビ（微生物）の生態を知る②資料への影響を知る③環境制御による予防と監視④カビが繁殖した場合の処置方法の順番で、実際の具体的な事例の説明があった。以前はカビが生えたら取り除くなどの処理を中心とする対策が主流だったが、今は環境を整備する事でカビ被害を未然に防ぐ対策が中心に変わってきている。水拭き、掃除機の順番で定期的に掃除をする事や、中性紙の保存箱に入れるのが一番効果的だが、埃が体積しやすい天面には薄葉紙を一枚かけておいて、定期的に交換する事など具体的で効果的な対策が紹介された。示されたカビ対策は目から鱗が落ちた。

高鳥氏の講演では、カビの生態や発生メカニズムと健康被害について説明された。本などによく発生するカビは、20～30℃の温度、65～90％の湿度、酸素、栄養があると発生する。カビの人体への影響として感染症やアレルギーを引き起こすことがあるので、掃除をする際にはカビが体につかないように注意が必要である。

午後は事例報告で、まず初めに眞野氏が都立中央図書館で実際に行ったカビ対策の実例を

報告された。空調機に設置した紫外線殺菌灯が効果を上げ、付着菌や浮遊菌が劇的に減少したとの事であった。また、図書館全体でカビを防ぐ意識を高めるため、マニュアルを作成したり、講演会を開いたりしているという報告があった。次に、東京大学の菅野氏、田﨑氏から東京大学付属図書館のカビ対策について報告があり、通風孔の清掃と、風が直接当たらないようにするため段ボール製の清流板が効果を上げたとの報告があった。二つの事例とも、カビと一進一退、試行錯誤を繰り返しながら対策を行っており、非常に参考になった。

イカリ消毒によるワークショップでは検査のための「綿棒拭きとり法」や実際に作業をする時の作業服や機材をみせて頂いた。特に印象深かったのは５つのＳ（整理・整頓・清掃・清潔・躾）の徹底がカビ予防に重要という事であった。

今回、カビに対する知識がほとんどないまま参加した分科会であったが、午前中の基調報告でカビに対する知識と対策を理解する事ができ、午後の事例報告でカビと向き合って行っている対策を実際に知る事ができた。当館（図書室）は幸運にもカビは発生していないが、一度カビが発生してしまったら、その対策をしなければならず、カビが発生しない環境を整備する事が重要で、そのためには資料を保存している場所を定期的に清掃し、温度・湿度の記録をつける事が必要だと痛切に感じた。言われてみれば当たり前の事だが、基本的な事が重要なのだと気づかされた大会だった。

（ちのね　たく・野球殿堂博物館図書室）

## 雑感「３年を経て考える福島の図書館」其の二
## 「沿岸部図書館の資料補完を考える」

吉田和紀

津波の映像は今でも痛々しく、記憶から消えることはないだろう。幸いにして、福島県内に津波被害を被った図書館はないが、津波による資料被災が皆無であったわけではない。貸出中の資料がそれに当たる。

その日、沿岸部にある15の図書館が貸出していた資料の総数を正確に知ることはできないが、10万冊前後と推察される。それらの中には、間違いなく津波被害を受けた資料は存在するし、住民避難により返却に至っていない資料もある。また、福島県の場合、原子力発電所事故に伴う避難も絡んでいる。因みに避難者数は、2014年11月現在で県外に46,070人、県内に75,679人となっている。(復興庁･福島県調べ)

こうした中、震災以前の貸出中資料に対する督促は、基本的に特例措置として実施していないため、その回収は積極的に望めるものではない。資料の多くは一般的なものと考えられるため、再購入も手段の一つであるが、係る経費を考えれば厳しいと言わざるを得ない。中には絶版資料や地域資料も含まれていることから、何らかの補完体制は必要なのかもしれない。

震災後、資料支援に対し福島県立図書館は一つの決め事をした。「事前にリストをいただく」「リストにより被災地図書館から希望を募る」「必要な資料だけをいただく」というものであるが、必要な資料を選択できる環境は、結果的に効果的支援につながったものと考えている。図書館においては新刊図書だけが収集対象ではない。特に被災地図書館にあっては顕著な部分であり、震災により生じた資料の空白をいかに埋めるのかが課題である。

（よしだ　かずのり・福島県立図書館）

**資料紹介** BOOK

# 『文化財IPMの手引き』

●編集：公益財団法人文化財虫菌害研究所理事長　三浦定俊
●執筆協力：九州国立博物館（本田光子、秋山純子）／株式会社タクト（下川可容子、江口みどり、小島理美、樋口ゆかり）／NPO法人ミュージアムIPMサポートセンター（新原茂春）／一般財団法人環境文化創造研究所（山崎久美子）
●発行：公益財団法人文化財虫菌害研究所
●64頁／A4版　●2014年３月発行

目次

まえがき
第１章　はじめに
第２章　文化財IPMについて
第３章　文化財IPMを進めるために必要な情報
第４章　IPMメンテナンス
第５章　環境の調査
第６章　有害生物等の調査
第７章　被害発見時の対処
第８章　IPMの実施体制
第９章　まとめ
付　録　（１）IPMに用いられる機器や用具類／
（２）文化財虫菌害防除認定薬剤一覧

本書は、文化財IPMの作業を始める際に使えるよう企画された実際的な手引きである。

まず第２章で日本の文化財分野における生物被害防除の歴史と、「総合的に管理する」というIPMの基本的な考え方を解説している。

第３章では文化財に影響を与える因子、平常値を知ることや問題を発見すること、原因を探り計画を立てることの重要性を説き、IPM情報の収集→早期発見・対処→環境管理を継続することによって目に見える有害生物のない状態に

しようと呼びかける。

第４章はIPMメンテナンスと一般的な清掃の違い、IPMメンテナンスの方法と用具、具体例の紹介である。環境に関する情報収集・情報解析を行うのがIPMメンテナンスの特徴だということがよくわかる。第５章は温湿度・光・空気質（大気汚染物質）の測定の実際の解説である。さまざまな測定機器をカラー写真で紹介し、使い方の注意点も説明している。

第６章は虫、カビ、ダストの観察と調査法をまとめている。特に「見過ごされがちなカビの例」の写真は、埃や汚れと勘違いしやすいものが多く、参考になる。第７章は被害拡大の防止、殺虫・殺菌の方法を解説する。被害資料だけでなく環境の改善も再発防止策の一つである。

さらに第８章はIPMの実施体制（業務としての位置づけ方、場所による分担等）について解説し、今後のIPM技術者にはボランティアのIPM活動を指導する技量も求められるとしている。

全体に、考え方や使用する道具、作業の様子などが、図表や豊富なカラー写真で具体的にわかるよう工夫されており、IPMに取り組もうとする実務者に対する配慮が感じられる。巻末付録として本文に関係する機器や用具類の名称・製造元・型番等の一覧と、認定薬剤一覧も収録されている。

入手方法については、発行者のサイトの「図書・器材等」に案内と購入申込書があり、研究所の会員でなくても頒布価格1,800円（税別・送料・振込料別途）で入手可能。

（横山道子・資料保存委員会委員）

## 資料保存委員会委員の紹介

資料保存委員会は、資料保存に関連した諸課題の解決と進展をはかることを目的としております。

第34期（2013～14年）も、分科会運営、研修（資料保存セミナー）、全国図書館大会分科会運営、「ネットワーク資料保存」の発行等を行っております。

新井浩文（あらい・ひろぶみ）
埼玉県立文書館
副委員長・研修・「図書館年鑑」担当

担当職種は学芸員なので根っからの図書館人では無いのですが、保存環境や取扱う資料をはじめ、類似機関としてこれからも微力ながら図書館との橋渡しをやっていきたいと思っております。今後とも、よろしくお願いします。

神原陽子（かんばら・ようこ）
埼玉県立久喜図書館　子ども読書推進担当
全国図書館大会担当

大会は、資料保存について多くの人に理解を深めていただく貴重な機会です。満足して帰っていただけるように、円滑な運営を心がけています。

児玉優子（こだま・ゆうこ）
（公財）放送番組センター
ホームページ更新担当

資料保存の奥深さと難しさを改めて感じるこの頃です。主な関心は資料各資料の保存です。

佐々木紫乃（ささき・しの）
東京都立中央図書館（資料修復専門員）
全国図書館大会担当

今年から大会担当となりました。カビをテーマにした今年度は反響も大きく、悩んでいる図書館が多いのだなと感じました。今後も皆様のお役に立つテーマを設定していきたいと思います。

眞野節雄（しんの・せつお）
東京都立中央図書館（資料保全専門員）
委員長

他の委員のサポートを少しでもできれば…という「名ばかり」です。資料保存や修理についての研修会講師依頼があれば全国各地に出向いています。新委員大募集中です。まあ楽しいですよ。

高橋幸伸（たかはし・ゆきのぶ）
国立国会図書館
研修・ホームページ更新担当

2014年７月から委員になりました。資料保存の専門家ではありませんが、お役に立てるよう努力していきたいと思います。

田﨑淳子（たさき・じゅんこ）
東京大学駒場図書館
研修担当
　今個人的に熱いテーマは「自動書庫でのIPM」です。

宮原みゆき（みやはら・みゆき）
浦安市立中央図書館
ネットワーク資料保存担当
　刊行物編集･発行はなかなかしんどいですが、みなさまのご助力で完成させています。取り上げてほしいことがありましたらどんどんご連絡ください。

横山道子（よこやま・みちこ）
神奈川県立平塚江南高等学校図書館
大会の分科会運営の補助等
　たまにしか出ないお化けのような存在ですが、ろくろっ首のように？細く長く務めます。

## 資料保存委員会の動き

第34期（2014年度）
　日時：2014年８月20日（水）
　場所：日本図書館協会会議室
　出席：６名
　内容：報告事項（ネットワーク資料保存108号進捗状況／ホームページ更新の遅れと担当者追加及び手続について）
　協議事項（大会分科会、実行委員会報告、準備品の確認／第２回以降の資料保存セミナー企画／外務省外交史料館見学会日程調整）

第34期（2014年度）
　日時：９月17日（水）
　場所：日本図書館協会研修室
　出席：８名
　内容：報告事項（ネットワーク資料保存108号刊行／外務省外交史料館見学会、広報・募集内容・広報・締切・先方への手続き等確認）
　協議事項（大会分科会、借用備品・前日準備打ち合わせ・当日分担・各自持参品・委員の申し込み状況等確認／第２回資料保存セミナー、自動化書庫で調整、日程･広報･内容等）
　その他（JHKシンポジウム、受付打ち合わせ･持参品･共催としての理事長挨拶調整等確認）

2014年度見学会
　日時：10月８日（水）
　場所：外務省外交史料館
　参加：10名

第34期（2014年度）
　日時：10月15日（水）
　場所：日本図書館協会研修室
　出席：７名
　内容：報告事項（ネットワーク資料保、2013会計報告・109～110号企画案／ホームページ、主催事業アップ報告および予定・担当追加アカウントについて／研修、外交史料館見学報告）
　協議事項（第２回資料保存セミナー、日程･広報の予定／大会分科会､実行委員会報告･前日準備参加者、時間帯確認、当日分担決定、配布物確認、事務局への確認事項）

第100回全国図書館大会第17分科会
　日時：11月１日（土）
　場所：明治大学リバティホール
　出席：午前95名、午後88名

ネットワーク 資料保存　第109号　2015年2月
編集・発行：日本図書館協会　資料保存委員会
〒104-0033　東京都中央区新川 1-11-14
☎03-3523-0812　FAX 03-3523-0842
郵便振替口座 00120-0-119624
印刷：株式会社アップス
用紙：三菱書籍用紙（イエロー）AP
（pH8.1冷水抽出法）
年間購読料：2000 円（年 4 回刊行、送料込み）
定価：500 円（本体価格　476 円）